



思文閣出版
1,995円(税込)

錨をあげて

新島襄を語る(三)

本井康博 (文学神学部教授 著)

本井さん(新島にならって)、わざわざ「卓」配便をありがとうございました。ご著書をお贈りいただいた前後、悩み考える機会が多く、その一つの答えを得たいがために、文字通り、むさばるように本書を読んだことを率直に吐露いたします。

同志社の創設者新島とその時代について、「検証」と「顕彰」のバランスのなかで、平易にお話いただき、それは、私の心のなかにぽつと灯がともるように、じんわりとした感動を与えてくれました。

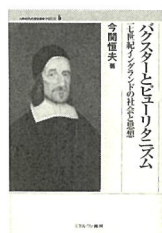
知る人ぞ知るエピソードとはいえ、足利少年の同志社入学、

松本五平さんの新島への敬愛などは、新島が二百年かけて創り上げようとした同志社に脈々と受け継がれるべき「理念」を教え諭すものでした。金子みすゞの童謡と「星の王子様」と新島に通じる「見えないもの」を見る「心」の同一性についての本井さんの語りは、この本の私にとってのクライマックスでした。

その一方で、本書は「錨をあげて」脱出した新島の決心になぞらえて、新島学へ船出した本井さんの「自分史」でもあり、また、「船出」を前に逡巡する旅人へのエールの書でもあります。

本井さん、書評らしからぬ文章になりましたが、悩み考え続けていた一つの答えを探す道筋が見えてきました。その道を与えてくださったことに對して、本井さんへの感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

西村 卓 (大学経済学部教授)



ミネルヴァ書房
4,410円(税込)

バクスターとピューリタニズム 十七世紀イングランドの社会と思想 今関恒夫 (文学文学部教授 著)

本書は広くいえば、「宗教改革と近代社会の成立」をめぐる一研究である。人権思想と民主主義、近代資本主義の生誕に立ち会ったのは、ルターやカルヴァンではなく、イギリス・ピューリタニズムであった。ここでは、代表的ピューリタン牧師バクスターの活動と著作を手がかりに、幅広い視野と綿密なテキスト分析を組み合わせて、宗教的实践の社会的な作用が明らかにされている。

前半では、まず、宗教運動としてのピューリタニズムが厳密に定義されたのち、その影響が経済、政治、社会文化とのかか

わりで浮き彫りにされる。膨大な研究文献が丹念に読み返され、興味深いさまざまな事実が紹介されて、運動の諸相が明らかにされる。

後半では、バクスターの重要な著作が独自に分析されている。主著「聖徒の永遠の慰い」から「青年への勧告」まで、当時の信徒に実際に指針を与えたものであり、それ自身が敬虔な人間形成の現場を彷彿とさせるのである。

本書の論理構成を見れば、やや敬遠したい向きもあるかも知れない。しかし、記述はきわめて具体的で、人間味ある事実に出会うことができる。適宜、写真や図表も用いられており、親しみやすいイギリス社会史、宗教史ともなっている。むしろ、本書の問題関心の背後には、意味喪失の現代に対する著者の誠実な問いかけがあることは言うまでもない。

梅津順一 (聖学院大学教授)



日本評論社
5,250円(税込)

世界の立法者、ベンサム 功利主義法思想の再生 戒能通弘

(大学法学部准教授) 著

本書は、J・ベンサムの功利主義法思想を、新しいベンサム全集や最近の研究動向に依拠して、再構成するものである。

ベンサムは、功利主義の観点から、法学を中心とする幅広い分野で活躍した人物である。法思想的には、彼の功績は、法実証主義と功利主義の基本理念を提示した点にある。ところが、彼の法実証主義はR・ドゥオーキンによって、功利主義についてはJ・ロールズによって、克服されたもの、あるいは克服されるべきものとされている。著者は、以上の評価に対して、ベンサムの意図を、彼自身の言説

に即して明らかにしようとする。著者によると、ベンサムの法実証主義と功利主義の真の姿を理解するには、彼の「世界の立法者」としての側面を検討する必要がある。そこで著者は、「世界の立法者、ベンサム」の、功利主義法思想の解明へと向かう。

本書ではまず、ベンサムの法典化論の前提となる、コモン・ロー批判が検討される。次に、彼のパノミオン(総合法典)の全体像が提示される。さらに、「世界の立法者」たらんとしたベンサムの軌跡が示される。彼は、世界各国に働きかけ、自らのパノミオンを広めようと試みていた。結語では、全体の検討を踏まえて、「ベンサム法思想の真の姿」が明らかにされる。

本書は、ベンサムの法思想が持つ、現代日本の法状況への含意にも言及する。その意味で、本書は、日本における「法化」や「法の支配」の在り方を考える上でも、大いに示唆的である。

濱 真一郎 (大学法学部准教授)

グローバリゼーションとアジア

布留川正博 編著



ミネルヴァ書房
5,250円(税込)

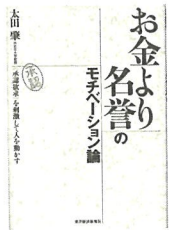
グローバリゼーションとアジア 21世紀におけるアジアの胎動 布留川正博

(大学経済学部教授) 編著

現代のグローバリゼーションとはなにか。貿易、投資、情報などのボーダーレス化が進むだけではない。はげしい不安定性と投機的経営戦略をグローバルに普及させる金融グローバリゼーションの段階をさすのである。しかも、各国がたどるグローバル化の過程には違いがある。ところで、アジアはこれにどう対応しているか。二つの点に注目しなければならぬ。ひとつは、アジアが世界の成長エンジンになっていく点である。ふたつは、1997年のアジア通貨危機にみられるようなはげ

しい経済変動を経験している点である。本書は、このようなアジアの胎動を解明しようとしている。二部構成をとっている。第一部は、「アジアの地域統合と各国経済」である。東アジア共同体構想にいたるまでのプロセス、アセアン地域経済統合、アジア通貨危機後の金融政策、韓国における外国投資が企業にあたえる影響、グローバル化のなかのインド連邦主義の諸論文からなっている。第二部は「グローバリゼーションの諸側面」である。中国、日本、フィリピン、台湾、などにおける企業改革、国際事業展開、労働市場のグローバル化、貿易摩擦の問題を解明している。本書は、共同研究プロジェクトとして組織されたものであるために必ずしもまとまりは十分ではない。また、取り上げるべくして触れられなかった問題もある。しかし、共通の問題意識をもって構成されている点は高く評価される。

内田勝敏 (大学名誉教授)



東洋経済新報社
1,680円(税込)

お金より名誉のモチベーション論

太田 肇 (天学政策学部教授) 著

著者は「承認」が社会人にとっていかに重要かを説く第一人者である。前著「認められたい」は自己実現が巷で盛んに言われていたときに「承認」が社会人にとってきわめて大切なものであることに気づかせた。本書はさらに進んで承認には「表の承認」と「裏の承認」があるとし、組織のなかで起こる多くの事象をこの二つの概念で説明している。

好著の第一の条件は日頃の経験から理解できることである。著者の著作は今回の著作に限らず我々が生活のなかで経験する事象を使って説明しており、学

生やサラリーマンにも分かりやすい。一例として、日陰になった木に鉄板から反射した光が当たって木が大きくなったという説明である。第二の条件は、本のなかで著者が説明した事象だけでなく、読者がその概念を使って日頃から疑問に思っていることを説明できることである。

たとえば評者は組織の構成員のうち少数の人たちが平均よりはるかに上になるのはなぜか、と想っていた。この現象は80・20の法則(パレートの法則)と言われる。本書の承認の概念を活用すると、承認はある限られた人たちに与えられるので、与えられない人たちとの間に差が生じて結果としてこうなる、と説明できる。

本書は著者が示唆した数々の知見そのものに意義があるだけでなく、読者に社会事象を理解する目を開けさせてくれるのに最適な本である。ぜひ一読を勧める。

森 雄繁 (甲南女子大学教授)



臨川書店
2,625円(税込)

荒ぶる京の絵師 曾我蕭白

狩野博幸 (天学文化情報学部教授) 著

江戸時代の画家・伊藤若冲の熱狂的なファンが急増している。発端は、2000年の京都国立博物館「若冲」展だった。

その〈伝説の展覧会〉を前職のときに企画実施したのが、著者の狩野博幸氏にはかならない。氏は、続いて2005年「曾我蕭白」展を企画。本書は、その会期中、企画者自身が3回にわたって行った講演会の講演録で、話し言葉でつづられている。ギャグ満載の狩野節が炸裂、ともかく楽しい。臨場感あふれ、ぐいぐい引き込まれていく。

曾我蕭白は、若冲や円山応挙、

池大雅らと同じ18世紀、江戸時代の半ばころの画家。この本を読めば、蕭白のことを知らなかった人は、上品・優雅といった言葉ばかりで形容されがちな京都文化の世界に、人間味を前面に押し出すこんなに力強い画家がいたのか、と圧倒的な衝撃を受けるはずだ。すでに蕭白を知る人も、異端・奇想と語られがちなこの画家が、けつして異端ではなく、むしろ京都文化の重要な文脈に位置することを認識させられるにちがいない。

作品紹介も充実。著名作品だけでなく、展覧会で発見された作品、海外所在の作品など、数多くの蕭白作品が図版付で登場し、一作一作の魅力が熱く語られる。語りは具体的に分かりやすく、次々と絵のツボを押さえていく。

蕭白のドラマティックな生涯、比類の無い絵画世界。その実像をえぐり出した刺激的な本として、一読をお勧めしたい。山下善也(京都国立博物館主任研究員)



NTT出版
5,670円(税込)

実践考古学GIS

先端技術で歴史空間を読む

宇野隆夫編著

鋤柄俊夫 (大学文化情報学部准教授)

津村宏臣 (大学文化情報学部専任講師)

他執筆

地理情報システム (GIS) は考古学や文化財の分野で非常に注目されている手法である。地理情報システムそのものに関しては考古学、文化財に関わる者の多くがその有効性を認めている。しかし、実際に地理情報システムを用いて何をしたらいいか、何ができるかわからないというのが現実だろう。

そのような状況の下、本書には考古学GISの日本におけるトップレベルの研究者達による具体的な実践が納められている。その中で、鋤柄俊夫氏の論考は発掘調査時における情

報の取得について述べられている点が注目される。地理情報システムの特徴の一つとして数量化と定量分析を挙げることができる。本書での研究における主な対象は遺物と景観である。それらと同じように遺構に関しても、遺物や景観とあわせて定量分析が可能なのはである。鋤柄氏はそのような視点から平安京の里内裏や南山城を例として分析を行っている。その研究は遺物、遺構の分析とともに遺跡が残された「場」や「地域」に非

常にこだわったものである。日本での考古学における本格的な地理情報システムの利用は長くはなく課題も少なくない。だが、本書でも述べられているように、今は多くの実践を積み上げていくことが必要であり、その中で課題や問題を克服することが求められるだろう。しかし、いくら地理情報システムによる分析の技術が発達しても、その結果を解釈するには、いままでの基礎的な考古学的手法が必要なのは言うまでもない。

市澤泰峰 (名古屋教育委員会)

見附台考古資料館学芸員



世界思想社
2,310円(税込)

アメリカ研究の理論と実践

多民族社会における文化のポリティクス

佐々木隆 (大学アメリカ研究科教授)

和泉真澄 (言語学専攻准教授)

他編著

アメリカとは何か、という問いに原脈を見取ることが出来る営みがアメリカ研究であろうが、この営みが問い続けなければならなかったのは、みずからひとつの学問領域でありうるのか、という問いであった。本書は、本学アメリカ研究所部門研究およびアメリカ研究科スタディー・グループに集った若手研究者たちによつて試みられた、真摯な問いかけの軌跡である。軌跡という言葉を使ってみるのは、文化研究としてのアメリカ研究の方法・理論の紹介とその実践例を交互に織り込むという、それ自体工夫された体裁が共同研究の臨場感を伝えてく

れるからというだけではない。それ以上に、昨今ますます深化していく文化研究の現場から「文化ポリティクス」「ヘゲモニー」と抵抗のポリティクス、「アイデンティティ・ポリティクス」など前半の章題となる方法概念を学び取りながら、それらがアメリカと呼ばれる容易に捉え難い対象に適用可能であるのか、適用しうるとしたらそこから「見えてくる」のはなにであるのか、を究めていく研究者の学びと発見の高揚に至る過程が本書から際立ってくるからである。「見えてくるもの」、それは後半の章題「国民国家像への挑戦」「国外への視線、国外からの視線」に伺えるように、「合衆国の外へ」と研究対象を広げていく可能性であろうし、国家の境界を越えて私たち自身に内在するに至った「アメリカなるもの」に対峙する眼差しであろう。文化他者の学びが自らの立ち位置の発見を導いてくれる本書は、高度な意味で初学者への格好の入門書である。

林 以知郎 (大学文学部教授)



新泉社
1,575円(税込)

聖なる水の祀りと 古代王権・天白磐座遺跡

辰巳和弘 天学歴史資料館教授 著

日本の国の成り立ち、そこで交わされた様々な精神や観念、それらを解き明かす鍵は幾重にも積み重ねられた列島津々浦々の地域文化のなかにこそある。今は浜松市に合併した静岡県引佐郡引佐町、ここに著者をして、遙かな古代祭祀の実相を実感させるに至った天白磐座遺跡がある。

磐座とは古代のカミが拠った巨石、「カミの座」である。ここで筆者は、同遺跡が地域の水源となる水分の地に所在することに着目、類例との比較を経て、古代王権にとっての聖水信仰の

重要性を鮮やかに描き出した。本書では著者らによるドラマチックな遺跡発見の経緯から、学術発掘調査による検証、全国の類例との比較研究が手際よくまとめられ、古代祭祀研究の格好の手引書となっている。豊富な写真や付図も、読者の理解を絶妙に助けるであろう。

本書によつて、読者は読みながらにして、天白磐座遺跡という細い針の穴から、難解な古代祭祀の深みを垣間見る知的体験を共有することができるであろう。引佐という地域の現場から得た視点とそれに対する思索、学説とは、このような営みを紡ぎ合わせて形成されてくるのだ。歴史を学ぶ人だけでなく、広く日本文化を考えたいという人にこそお勧めしたい。

著者は森浩一先生をはじめとする伝統の同志社考古学の今を担うお一人。常に遺構・遺物という物質資料から古代人の精神文化に鋭く切り込んでいる。

穂積裕昌 (三重県歴史文化財センター)



世界思想社
2,415円(税込)

二〇世紀女性文学を 学ぶ人のために

見玉実英 (女子大学名誉教授)
杉野徹 (女子大学文学部教授)
安森敏隆 (女子大学文学部教授) 編

3名の編著者は英語・英文学科と日本語・日本文学科を擁する同志社女子大学に相応しい書物を編纂された。

本書の構成は、伝統と慣習の対峙、戦争にまきこまれた女性の生き方、女性のアイデンティティのありかたなどから20世紀女性文学の特色を考察し7つの見どころにまとめた見玉氏による第1部、さらに第2部「世界の動き」および第3部「『新視覚』で20世紀女性文学の全貌をとらえ、そして本書約半分を占

める第4部「『案内』は厳選された30篇の日本文学作品と(邦訳のある)50篇の外国文学作品を28人の執筆者たちによる個別作品の具体的解説からなりたっている。まさに題名通りの道標になる書物である。

しかも本書はたんなる「入門書」ではなく、その上をいくもので、示唆に富む論文に満ちている。たとえば、安森氏の20世紀日本の女歌は1901年刊行の「みだれ髪」で始まるが、与謝野晶子ものちには「やさしい母・妻」に変化したこと、同様に中城ふみ子、青木昭子、河野裕子、俵万智の歌にも「妻」「母」が詠われているとの指摘は刺激的である。また戦後市民権を獲得したマンガ、それも70年代の少女マンガがフェミニズムを基本理念としているとの杉野氏の分析は、マンガに不案内な筆者にとっては目に鱗であった。

岩山太次郎 (天学名誉教授)



キリスト新聞社
2,730円(税込)

聖書 語りの風景

創世記とマタイ福音書をひらいて

中村信博 女子大学文学部教授

石川 立 天学神学部教授

越後屋朗 天学神学部教授 編著

聖書は意外と読み難い。聖書を前に戸惑い躊躇う者に対して寄り添い、「読み方」に焦点を合わせ、聖書自体の語る風景を眺め、味わうことへと導く格好の入門書が出版された。本書は学風の異なる2人の碩学(橋本滋男氏、野本真也氏)の退職記念として献呈されたものである。しかし、献呈論文集として、門人の業績を誇示するものではなく、「聖書と一般読者に仕えて、読者を聖書の多彩な世界へと案内する」姿勢で編集されている。研究者・教育者・牧会者であった両碩学の門人ゆえの味付けである。結果、同志社の

「聖書学」の学問の深さ、教育の広がり、信仰の篤みを随所に垣間見ることが出来る。

本書は聖書の初學者や学生を讀者に想定し、「テキストは全てのの人に『開かれて』いる」との認識に立ち、聖書学的見識に基づき、聖書の世界観や視座を「道案内」する。人を支配したり、人に迎合したりする生き方ではなく、脆弱と共に、自らを共同性の中で造り変える「歩み」や自己抑制を働かせた自律した「生き方」を「案内」する。また、「イエスにとって、隣人とは『わたし』を中心において探すものではなく、困っている人を中心として手を差し伸べる者が隣人なのである」との視座を「案内」する。基礎的知識が解説されている各章のコラムも「道案内」に一役買っている。聖書の「案内」を通し、聖書の世界へ私たちの興味関心を導き、さらに、私たちに生き方への問いと励ましを与える「宝の書」である。

小崎 眞(女子大学生活科学部准教授)



ナカニシヤ出版
1,575円(税込)

就職★勝つヒント

影山貴彦 女子大学文学部准教授 著

今まで多くの新人と一緒に仕事をしてきた。入社直後から頭角を表すのは、自分で考える事に慣れている人だ。逆に、すぐ答えを他人に求め、よく考えずにとりあえずやり、結果を周りのせいにする人は、何年たってもパツとしないし、本人もいつも不機嫌だ。考えない人に達成感などないのだから。企業に入ると、様々なマニュアルがある。その通りこなすのは、社員に求められていない。学生バイトで十分だ。社員は、そのマニュアルを作る事が求められる。答えを見たがる人には不可能な仕事だ。よって、企業は面接でその

人が考えられる人かどうかを見ようと、様々な質問を投げつける。その具体的な返答から、その人の毎日が見えてくると、もう少し聞きたくなる。その人なりの切り口が、考える人には備わっているから、大した話で無くて重要だ。それが、模範解答の仮面で固められると判断が出来ず、落選となる。もし本当は優秀な人なら、とても不幸な事だ。答えのある仕事など、どこにもない。答えは自分で考えて作るものだ。この本は、その事を一貫して語る。この本には、就職活動という、恐らく始めて答えのない世界に漕ぎ出す学生が、考える人に効率よく変わる為のノウハウが詰まっている。自分が自分として勝ち抜くために、どうかこの本の事を実践して、小さく傷ついて、立ち上がって欲しい。そうすれば学生は、面接で何かを醸す人へと確実に変わる。そんな学生の話を、聞かせて欲しい。

須沢 匠(株式会社デンソー)

水はなんにも知らないよ

左巻健男 女子大学現代社会学部教授 著



ディスカヴァー・トゥエンティワン
1,050円(税込)

「ありがとう」という言葉を見せた水は、美しい結晶になり、「ばかやろう」という言葉ではきたない結晶になるか、あるいは結晶ができない」「マイナスイオンの多い空気を吸うと健康によい」「ゲルマニウムには健康パワーがある」——こうした言説あるいは宣伝文句を、誰しも一度は見聞したことがあるかもしれない。

本書は、これらを科学的根拠のない「ニセ科学」だと喝破する話題の新書である。著者によれば、「ニセ科学」が問題なのは、科学的雰囲気をもたせることで人々を信じ込ませ、詐欺まがいの商売が行われていたり、

学校教育でも道徳の授業などで使われ、「水は言葉を理解するものだ」と本気で信じている子どもたちが出ていることだという。

本書は、とくに「磁化水」や「ナントカ還元水」などのような様々な水の商品の説明の「ニセ科学」たるゆえんを、正確な科学の知識を用いてひとつひとつ丁寧に説明していく。一部には高度な化学の知識がないと難しいと感じられる内容も含まれるが、全体的にわかりやすく書かれている。

著者は系統立った理科教育を通じて科学的リテラシー(科学を理解し、活用する能力)の向上と普及を提唱する。安易な知識の詰め込みではなく、興味や関心を持つて経験的に知識を身につけ、そこで学んだ知識を十分に活用でき、ニセ科学に対して批判的に対応できる本物の科学的リテラシーの育成が今こそ求められているのである。

小針 誠 女子大学現代社会学部准教授

藤原道長 男は妻がらなり

籾谷 寿

(女子大学現代社会学部特任教授 著)



ミネルヴァ書房
3,150円(税込)

藤原道長の生涯をたどった単行本としては、これまで赤木志津子氏、北山茂夫氏、山中裕氏のそれがよく知られているが、このたびの新著は、道長伝として最も詳細なものと言える。その詳細さは、一にかかつて、道長の日記『御堂関白記』の記事を中心に、藤原実資の『小右記』、藤原行成の『権記』などの同時代史料、そのほか関連史料を丹念に読み解いている点にある。

そして、どちらかと言えば栄華を極めた平安貴族の代表としての側面ばかりが強調されがち

な道長にも、時に喜怒哀楽をストレートに表し、病氣や死の恐怖といった「人間」としての苦悩にさいなまれる日々があったことを改めて跡付けていった点にある。その一例として、未来の天皇候補としての孫の誕生を手放しで喜ぶ道長の姿は(181頁、まことにほほえましい)。

著者は「道長と名のつく本は執筆の過程ではできるだけ見ないようにした」と言われるが、実際には巻末の「参考文献」に列挙された多数の先行研究がふまえられている。同時に、道長の生きた舞台——平安京とその周辺——に関する著者自身の研究蓄積をも縦横に駆使しながら書きおろされた本書は、従来にも増して「人間」としての道長が身近に感じられる点に最大の特徴があろう。道長の吉野金峯山詣を追体験すべく、このたび敢行された著者自身の大峯山寺参詣の旅は、本書の圧巻である。

竹居明男(大学文学部教授)